連載

欧州から（3）MUSICA VIVA 音楽祭を訪れて

Hiromi J. Ishii
City University UK
Dept. of Music

概要

この連載記事は主に欧州における現在の電子音響音楽に関する様々な活動や問題を電子音響音楽と一般社会、電子音響音楽と教育、電子音響音楽と現代音楽界などの観点からレポートしていく。今回は 9 月にポルトガルのリスボンで開催された MUSICA VIVA 09 の様子を伝える。同音楽祭は今年で 15 回目を迎えた。1999 年からは同主催団体 Miso Music による電子音響音楽のコンクールも行われている。今回筆者とヴィルフリート・イェンチのヴィジュアル・ミュージック・キューレーションが招待を受けて上演されることになり、同地を訪れ、また Miso Music 代表の Miguel Azguime 氏に対するインタヴューの機会を得たので、これをもとに同音楽祭とその背景事情をレポートしていく。

This article-series reports today's issues and activities associated to electroacoustic music in Europe from the viewpoints of "electroacoustic music and general society" "electroacoustic music and education" and "electroacoustic music and contemporary music society". This article reports the MUSICA VIVA Festival 2009 and the activities of Miso Music Portugal.

1. MUSICA VIVA 2009

MUSICA VIVA 音楽祭は基本的には現代音楽祭であり、その一部が電子音響音楽のプログラムとなっている。このため、多くのプログラムに最初に電子音響音楽作品数曲を置き、その後器楽作品が続くか、或は前半を電子音響音楽、後半を器楽作品とするなどの工夫が見られた。器楽作品などと共に同演奏会に電子音響音楽作品を組むことにより電子音響音楽に馴染みの無い聴衆に「まずは聴く」という機会を提供する事ができる、という目算もある。実際、聴衆の多くは器楽関係者のようであったし、これは同音楽祭が電子音響音楽を特殊な分野或はアンチ器楽として現代音楽から切り離すのではなく、現代音楽のひとつのジャンルとして取り扱っている、ということであろう。

9 月 11 日から全 9 日間に及ぶ音楽祭のプログラムはオーケストラから弦楽四重奏、ライブエレクトロニクス、スピーカーアンサンブルによるアコースマティック、我々のヴィジュアルミュージックのような映像を伴う作品という風にバラエティに富んだ内容であった。ポルトガルの現代音楽作曲家達の器楽作品も多く含まれていたが、作風は概して' 古典的' 現代音楽スタイルとでも言えば良いだろうか。この部分については筆者の守備範囲外なので触れずに、電子音響音楽作品へ焦点を絞ってみたい。今年はポルトガルの先輩作曲家 Cândido Lima の 70 歳を祝って、

彼の作品が多く組まれ、また一夜が彼のポートレートコンサートに捧げられていた。Lima はパリの Sorbonne 大学にて Xenakis に師事、博士号を取得後祖国の Porto にて教鞭をとり、現在では引退している。当時のユーピックを使った電子音楽や、今年作曲された作品などが披露された。その他の主な電子音響音楽作品としては Beatriz Ferreyra の作品集によるコンサート、Ferreyra、Robert Normandeau、また Azguime 自身の新作などが置かれ、Joaõ Pedro Oliveira（音楽）と Masakatsu Takagi（映像）の共同作品 Bloomy Girls も上演され、会場にはこれら電子音響音楽作曲家達の姿も見られた。

また会場のベレム文化センターの入り口広場では公募入選作品によるサウンドインスタレーション "Sound Walk" が連日 BOSE スピーカシステムから流されていた。短い "テープ" 作品 全 35 作のうちには Akiko Hatakeyama 氏の Far、Junya Oikawa 氏の Focus、Shinichi Morita 氏の Ezogiku の三日本人作品も含まれていたのだが、残念ながらどの作品が誰のものであるかは分からなかった。

2. ヴィジュアル・ミュージックの夕べ

今回筆者達が与えられた所要時間は 45 分という短いブロックであったため、通常のキューレーションではなく 8 分以下の作品群のみによるプログラムとなった。上演された作品は下記の通り（上演順）。

1. Graveshift： P. Bloland (music) A. Stavchansky

(images)

2. Seek Assistance : A.Stansbie (music) V. Shah (images)
3. Ryum : H. Ishii (music&images)
4. Discord - metal and meat : S. Larson (music&images)
5. Sphärenklänge : W.Jentzsch (music&images)
6. I’ve got a guy running : J. Kirk (music&images)
7. Destellos : E. Justel (music&images)
8. Mugenkei : W. Jentzsch (music) J. Detheux (images)

全作品とも fixed media 作品である。個々の作品については別の機会に譲るとして、選出の最も重要な基準は、音楽と映像の間に共感覚に基づく芸術的表現や構成的工夫が認められることで、サウンドと映像間のテクノロジー上のインタラクティヴィティは、これを応用していてもいなくてもよいとし、選出条件に含めていない。が、音楽は電子音響音楽であり、映像もこれと同等に高度にデジタル加工処理されたものであるか、コンピュータグラフィックスによる映像であることを条件にしていて、従来のヴィデオ作品に多く見られるような、ただ録画した画像のモンタージュ程度のもの、あるいはポップ音楽のリズムに映像のカットタイミングを同期させた程度のものは含めていない。

3. MISO MUSIC の活動とポルトガルの音楽事情

Miso Music 設立の経緯と構成は次のようである。もともと 1985 年に Miso Ensemble という室内楽アンサンブルが Miguel と Paula Azguime 夫妻によって発足、その後 Miso Studio が 1995 年に設立された。スタジオの設立目的は「テクノロジーと関連する音楽の創作、制作分野を支援するため」。現在 Miso 関連機関は、Miso Studio、Musica Viva 音楽祭とコンクール、Miso Record (関連 CD などの出版)、ポルトガル音楽情報センター (音資料)、そして音楽教育分野においてもコースを開催、若い人々の響きへの感性を育てる活動も行っている (www.misomusic.com 参照)。

しかしながらポルトガルで電子音響音楽が盛んだという話は聞いた事が無い。この点ではプラハの MUSICA NOVA コンクールも同様で、コンクールだけは長い歴史を誇っているのだがチェコという国自体において電子音響音楽が盛んなわけではないのだ。この点フランスが「自国の音楽」として電子音響音楽の発展に力を入れてきた背景を持つブルージュ音楽祭とは、これらの音楽祭（及びコンクール）は事情が異なる。

ポルトガルという国はカトリックを国教としている。宗教感覚の薄い日本人にとって、それが電子音響音楽となんの関係があるかと思われるかもしれないが、カトリックが強いということは保守的な社会背景を持つということを示唆している。このような社会背景は音楽にも当然反映されている。その保守的なポルトガルの音楽社会に電子音響音楽という新風を吹き込もうというのが Azguime 氏の意図であるようだ。

リスボンといえば、石油王グルベンキアンが美術館を設立したので知られているのだが、グルベンキアン財団の助成はもっぱら古典芸術やクラシック音楽の分野に集中し、MUSICA VIVA のような現代音楽や電子音響音楽分野への助成はないという。もちろん同音楽祭は多くのスポンサーを得てはいるのだが、グルベンキアン財団の比ではない。先端芸術音楽への理解がなかなか得られにくい、という社会事情は日本だけではないようだ。そのような環境にありながら、精力的な活動を繰り広げ続ける Miso Music。ポルトガル電子音響音楽界で唯一の砦ということになる。「私はたった一人で戦っているのですよ。孤独な戦士なのです」と同氏は繰り返した。

図 1. MUSICA VIVA 2009 の会場ベレム・文化センター。左手奥がコンサートホール。

4. 著者プロフィール

石井 紘美 (ヒロミ・イェンチ・イシイ)

博士 PhD（電子音響音楽作曲／音響美学）。DegeM、英国 SAN 会員。Visual Music のキューレーターとして活動、これまでに CYNETart、ZKM、ベルリン工科大学、エッセン芸術大学、ドレスデン芸術協会にて公演を成功させている。